2024年11月3日（日）主日朝礼拝説教

『律法からの解放』　井上隆晶牧師
ローマの信徒への手紙7章1～6節、ヨハネによる福音書19章28～37節

❶【私たちは死んだのである】
1節に「**律法とは、人を生きている間だけ支配するものであることを知らないのですか。**」とあります。パウロはここで「結婚契約」という例を用いて、律法と福音の関係を説明しています。人は生きている間だけ法律に縛られます。死んだ者は借金から解放されますし、あらゆる人間関係からも、またあらゆる仕事や契約からも解放されます。結婚も夫が生きているうちは妻は結婚関係に縛られますが、夫が死ねば解放されます。夫が生存している時に、他の男性と一緒になれば、彼女は罪に問われますが、夫が死ねば自由なので他の人と結婚しても罪にはなりません。人はこの世を生きる時に「ルール」を守って生きており、この「ルール違反」をすることを罪といいます。この「ルール」を聖書では律法、掟といいます。
4節を見ると「**ところで、兄弟たち、あなたがたもキリストの体に結ばれて、律法に対しては死んだ者となっています。それは、あなたがたが他の方、つまり、死者の中から復活させられた方のものとなり、こうして、わたしたちが神に対して実を結ぶようになるためなのです。**」とあります。
以前の私たちは律法・掟と結婚していました。律法は私たちを縛り、私たちを裁き、私たちは自由になることは出来ませんでした。しかし、私たちは洗礼によって死んだのです。洗礼というのはキリストと一体になる儀式、キリストとの結婚式です。それは神が定めた死んでよみがえるための儀式です。本当に殺して土に埋める事ができないので、あやかりとして水に沈めるのです。しかしキリストと一体なのでよみがえるのです。**キリスト教にはこの「死ぬ」ということがなければなりません。古い自分を殺す、古い自分を葬るということが大事です。それなしに、その上にキリストを着ようとしているから、上手くいかないのです。**

●だいぶ前に比叡山に見学に行って、そこのガイドの人から興味深い話を聞きました。その方は「**比叡山延暦寺は日本仏教の総合大学であり、心を洗う所です。何かを持って帰るよりも、捨てて帰ってください。**」と言われました。教会も同じだと思います。礼拝で「今日は何かいい話が聞けるかな」だけで来てはいけないのです。礼拝に来たら何かを捨てることをしなければなりません。わがままを捨てる、恨みや恨みを捨てる、こだわりを捨てる、どうしてもという願望を捨てる、ことです。献金は仏教では「**喜捨**」といいます。喜んで捨てることです。何かをもらおうと思ったら、何かを手離さなければならないのです。握りしめている手を開かなければどうやって神のくださるものを掴むことができるでしょうか。

弱いと言われている病人や障がい者が、どうして神の栄光を現わすことができないのだろうかと思うことがあります。それは彼らが本当に弱いかというと結構そ

うでもないのです。肉体は弱いのに、実に心の強情な人がいるのです。絶対に自分の考えを曲げない、自分は正しいと言い張り、自分の弱さを認めようとしないのです。たぶん認めたら生きて行けないと思い、必死に強くなろうとしているのだと思います。**その強さが、神の聖霊が入らない理由となっているのです。障子は破けなければ向こうの光が入ることは出来ないのです。**
自分に死ぬためには、律法を一生懸命に行い、自分の力では守れないという経験をしなければなりません。または人と徹底的に向き合って愛する努力をし、愛する限界を知らなければなりません。現代のクリスチャンは最初から律法を守る努力もしないし、福音を知ったのだからもう守らなくてもいいと教えます。ほどほど賢く、ほどほどお金もあるので、自分の力の限界を知る経験をすることがないのです。大事なのは砕かれる事、破ける事、正しさを捨てる事、自分の弱さを認める事です。これを死ぬ経験といいます。

❷【律法の支配をキリストは終わらせた】

先ほど読んだ、ヨハネの福音書ではイエス様が十字架の上で亡くなる場面が書かれていました。ここで「**すべてのことが今や成し遂げられたのを知り**」(28) という言葉と「**成し遂げられた**」(30) という言葉が二回出てきます。何が成し遂げられたのでしょう。それは救いが成し遂げられたので、古い世界が終わり、新しい世界が始まったことでしょう。**イエス様の死は、律法の支配の終わりを告げています。律法では、罪を犯した者が死ぬのです。しかし罪を犯さなかったイエス様が死んだのですから、律法の支配力は破壊されたのです。**キリストが裂かれたとき、古い律法も裂かれました。神殿の垂れ幕が上から真っ二つに裂けたのも、神様が自ら垂れ幕を裂いて、神殿制度を終わらせたことを教えています。私たちの罪の証書も同じように裂かれました。パウロはこう書いています。「**神は、私たちの一切の罪を赦し、規則によって私たちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘づけにして取り除いてくださいました。**」(コロサイ 2：13～14) **完全なもの（キリスト）が来た時、不完全なもの（律法）は後ろに退きます。主人（キリスト）が帰って来た時、僕（律法）の支配は終わります。**もともと旧約の律法（十戒）は、キリストが与えたものであり、完全なものではなく、その一部に過ぎませんでした。完全な方であるキリストが現れるまでの一時的な働き（罪を教えることだけ）をするものであり、実体はキリストにありました。だからキリストの中に律法が含まれるのです。律法はキリストが定めたものですから聖なるものであり、今でも有効ですが、人に罪を教えるだけでその場を去り、キリストという医者にバトンタッチします。**キリストが新しい律法なのです。あの方が語ったこと、行ったことが新しい基準になるのです。**

❸【支配者が変わるという事】

「**死者の中から復活させられた方のものとなり、こうして、わたしたちが神に対して実を結ぶようになるためなのです。**」(ローマ 7：4)

私たちは洗礼によってキリストと一体になり、キリストのもの、所有物となりました。だからキリストが自分のものを自分の好きなように扱って良いのです。この方は実に寛大で私たちをこう扱われます。「**私は自分が憐れもうと思う者を憐れむ**」（ローマ 9：15）、「**私はこの…者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしてはいけないのか。それとも、私の気前の良さをねたむのか。**」（マタイ 20：14～15）働きのない者を恵み、罪ある者を憐れんで赦し、永遠の命をくださいます。**私たちは律法の支配下から、キリストの支配下に移されたのです。**

●先日、TV で「ぽつんと一軒家」という番組を見ていました。山の奥の奥にポツンとある一軒家を尋ねる番組です。その日は沖縄の山の中にある一軒家を尋ねました。そこのご主人にこの山をいくらで買われたのですか？と質問すると、「〇〇ドルです」という答えが返って来ました。戦後は沖縄はアメリカの領土であったので、日本に返還されるまではドルが市場を支配し、法律もアメリカの法律が支配していたからです。銀行員がドルの札束を勘定している映像が映りましたが、何か不思議な感覚でした。

イスラエルの国はバビロンに滅ぼされ、神殿は焼かれ、城壁は崩され、町は破壊され、王様や貴族や学者などは捕らえられて奴隷となってバビロンに連れ去られました。それから 70 年の月日が過ぎ、ペルシャの国がバビロンを滅ぼすと、ペルシャの王キュロスは国中に布告を出しました。「**天にいます神、主は、地上の全ての国を私に賜った。この主がユダのエルサレムにご自分の神殿を建てることを私の命じられた。あなたたちの中で主の民に属する者は誰でも、エルサレムにいますイスラエルの神、主の神殿を建てるために、ユダのエルサレムに上って行くがよい。神が共にいてくださるように。**」（エズラ 1：2～3）こうしてキュロス王の命令でイスラエルの民は奴隷から解放され、自由の身にされました。更にバビロンの王が奪った神殿の祭具はすべて返還されたと言うのです。**これらの歴史の物語は支配者が変わると、法が変わるということを良く教えています。**

このキュロス王のことをユダヤ人はメシアとして崇敬しています。彼が解放者だからです。私たちはイエス様のことを「主」と呼びます。主とは英語では「マスター」ではなく「Lord」です。ギリシャ語では「キュリロス」です。この「主」という言葉は、神にしか使ってはならない言葉だといいます。キュロス王はキリストのひな形なのです。キュロスが王となり世界を支配すると人々が解放されたように、キリストが王となり世界を支配すると、人間は罪と死から解放されるのです。**キリストが支配する世界は何とすばらしい世界でしょう。これを神の国といいます。この世界の外にとどまってはなりません。この世界から外に戻ってもいけません。キリストの支配下にとどまりましょう。それは愛の支配、命の支配、赦しの支配です。**このような世界を作ってくださったキリストに代々限りなく栄光がありますように。